悟道歌

安心長寿の道

特257
519
968
51

始

有257
519

悟道歌

安心長寿の道

順序

一、自序
二、歌題縁據
三、悟道歌
四、卷末參考
五、書中の要領

自序

悟道歌は、神儒佛の三教に因りたるもの多し。予三教を得たる略歴を述ぶれば、儒教の方は八歳より十二歳まで細野半兵衛師に就きて、四書(大學、中庸、論語、孟子)五經(易經、書經、詩經、禮記、春秋)の素讀を授り、十三歳に津藩にて、村井元道、平松清藏の二師に就き十八史略、春秋左氏傳、李翰蒙求などを授り、文久二年より石川靖齋先生に就きて日本外史、日本政記、史記、前漢書、後漢書、三國志、晉書、隋書、唐書、北齊書、後周書、宋史紀事本末、陸宣公奏議、宋名臣言行錄、唐鑑、先哲叢談、(唐鑑は六册とも寫せり、先哲叢談も四册に寫せり)等を授る事五年五箇月にして、慶應三年六月に先生易簀し給ひしかば、其の後土井聲牙先生に隨ひて學べる事四年六箇月なり。資治通鑑の輪讀、文

章軌範、唐宋八大家文讀本の講義を聽けり。經書の講義もあり。自讀には老子、列子、荀子、莊子、韓非子、商子、王充論衡、劉向說苑、劉向新序、諸子彙函及び明清名家の文集隨筆なども有り。後明治三十年の頃、石川竹厓、石川靖齋兩先生の論語講案十四册をば、家族の者共に寫させて通覽し、又論語徵集覽二十册をも披見したり。

神敎の方は、父が中年に神道を尊敬し、歿する時神宮奉齋會より少敎正を贈られしほどなれば、行爲は申すまでもなく、屋敷内にも天照皇大神宮の社を建設せり。されば黑住敎をも敬ひたり。

佛敎の方は、予が祖母が佛法を信じ、母も晩年に佛を信じければ、予も名僧に知己多し。米澤知洞、加藤行海、金鎖廣貫、鈴木天山、辻井德順、竹内宜啓、佐々木狂介、村田靜照、村瀨乘信、川瀨良琛などの諸師なり。米澤師は小僧と成りて中山村より名古屋に移る時、予の祖母

が剃髮せる緣故を以て厚く交際せり。加藤師には、明治十一年の頃、福井竹三郎君と俱に日曜日に磯山まで通ひ、論理に必用ある因明を授りしを緣として、明治廿七年の夏、四天王寺にて大乘起信論の週間講義を開かれし時にも拜聽せり。今予の持てる起信論の書は、加藤師の賜ものなり。金鎖師には光明眞言の譯を授りしを始め、種々佛說を承り。辻井師には空假中の講話を承り。天山師には碧嵒錄や正法眼藏の講義を久しく承る。竹内師には眞宗勸學院に於て懇意に相成り、佐々木師は土井門にて昔の學友なり。村田師は少年よりの友なりき。大正六年の頃、津市下部田善德寺の住職山川眞鏡君が、加藤和尙の高足なる村瀨乘信君と相ひ謀り、毎月一回大乘起信論の講義を開かる。予輩往きて研究せり。然るに村瀨師大正十年五月朝鮮に布敎に趣かるゝに付き、川瀨師に

依囑せらる。　爾來昭和九年に至るまで、その研究せし所の書は維摩經、勝鬘經、法華經、淨土論註、無量壽經の或る章、敎行信證等なり。其の他、起信論を研究する爲に密乘沙門良恭師の述べし義記講義三册を求め、椿蓁一郎君より起信論義記顯正錄五册を借覽し、柚原完藏君より織田得能師の起信論講義を借りて四册に寫し、大原問答を研究するに就きて、森山實應君より大原問答纂釋廿卷、大原談義句解十册、大原談義選要鈔二册を借り、野口嶺誠君より無量壽經鈔を借れり。　家に織田得能師の佛敎大辭典無き故に、堤寛君を每度煩して煩惱障所知障の差別、五蘊の解釋など種々の取調べを乞へり。

和歌の方は、語格には明治十年の頃より師範學校にて十四種活用圖を敎ふべき故、津市岩田町の生川正香翁に就き退校後に之を學べりと雖、歌は一二首添削を得しのみ。　晩年に堤盛言先生に添削を乞ひ、先生逝去の後、その男盛道君に乞ひ、亦友人の小松雄治君に乞ひしのみ。　されど多くは道歌題外の歌に屬す。　元來道歌は遊戯に非ず。　道理を人に悟覺せしむべきわざなれば、　眞理の解し易く悟り易きを第一念に置き、意義を明にするを主として、興味などは最後に爲すべし。　之を添へて會得に妨げなきかと十分に思量して後に施すべし。　古き道歌に、暗の夜に啼かぬ鴉の聲聞けば生れぬ先きの父ぞ戀しき、と云へるあり。　聞けば、戀しき、の詞ある故に多年納得するに苦めり。　之をば、やみの夜に啼かぬ鴉の聲を聞き生れぬ先きに父母を見る、とすれば聊か解し易きなり。　乃、不生不滅の理を說きたる歌にて、鳴かぬは不生、鴉の聲を聞きしは不滅、生れぬは不生、父母を見るは不滅なりけり。

予今年是の書を述べて五百册を印刷し、之を知人に頒ち、我が憂苦を除きて人の憂苦を除き、我が安靜を得て人の安靜を得しめむと欲せり(しかし知人の内凡二三十人位は、是の書を要せず、自得する人もあらむ。) 而して資費を要する事なれば躊躇せり。 昨年十月十六日に至り、親友石川正作君適〻入り來れり。 予是の事を語れば我資費を投じて印刷せしめむと云へり。 予愉快天に昇る心地して、是全く神佛の擁護なりと、ひたすらその厚意を感謝したりき。

此の書一名安心長壽の道とあるを見て、人或は謂はむ。 此の悟歌のみにて長壽を得べきかと。 それ心は身の重なるものなり、その半分を占む。 その餘の半分は、飲食の選擇利害の心得、導引卽體操の毎朝廿分間の行事、平生心掛けて藥種を備へ置き、疾ある時、醫を招くまでの手當に用意する事などあり。 以上四箇條の外に最大

事の條件は、大凡勞働者を除く外、病に罹りて壽命を縮むる所の根原は、率ね身體の强弱を顧みずして精液を漏すに在り。 予や少年より婬慾盛りなり。 十六歳の時、書店にて貝原益軒翁の漢文の養生論を看當り、借り歸りて熟讀するに、彭祖が五百歳の長壽を保ちしは、全く屢〻女に接しながら精液を漏さぬに根原せし事をば懇切に陳述し、急流に勇退せよと敎へ示されき。 されば人世世繼ぎの子を得るまでは已むを得ざれど、尤も愼むべきは是の事なり。

予が今八十八歳の壽命を保ちたるは、全く貝原先生の賜ものなりと衷心より感謝せざるを得ず。 昭和十年二月の伊勢新聞に伊勢國飯南郡波瀨村植田儀兵衞翁は、今年百歳なり。 三十歳の時妻を娶れども、二年にて別れし故に子なしと云々。 是亦長壽の一例とも爲すべきか。

また昭和十年の調査にかかる全國一の高齢者は、岩手縣下閉伊郡田老村字柏内、倉平ハル女にて本年百二十一歳なりと聞けり。老婆がかゝる長壽を保ちし原因は、察するに、一は、長壽の系統よりし、一は、心の持ち方よりすと考ふ。此の老婆の口癖に、心をのんびりもて、と云へりとぞ。夫、授らぬ物を苦にして壽命を縮むるほど愚なるはなく、授らぬ物を早く諦めて心を苦めざるほど賢きはなし。ハル女は、若き時より生涯緣附かずと聞く。若き女にて嫁がぬは女の身に取りて苦痛の極なり。然るをばそれほどに苦にせず、之を諦めて、のんびり思ひて日送りせし事は、是全く長命したる原因茲に在りと推量すべきなり。

昭和十年六月序す

歌題緣據

○艱難憂戚成汝于玉　二首

○君子無入而不自得焉　自得の解

○君子居易以俟命　居易の解

○仁人之安宅也。義人之正路也

○君子見幾不如舍

○不遠復无祇悔

○居樂見苦兆爲智　在止於至善

○君子見幾而作不俟終日　俳諧歌

○後悔先に立たず　十二首

論語を引く　易經を引く

禮記を引く　佛足石の歌調

大學を引く　莊子を引く

佛敎の三說及ひ蜀山人の狂歌を引く　酒色を戒むる歌

○世紛無盡過眼空

○生事不豐隨意足

○人間萬事塞翁馬　詩の作者

名　塞翁馬は淮南子の人間訓に出づ

○一日之計在乎早旦

○一寸光陰不可輕　朱子勸學の詩

○成年不重來一日難再晨　二首　説明

○流水不腐戸樞不蠹　二首

○君子惜精　二首

○悟道と導引とは長壽の法

○仁とは人を相け偶ふ也　清阮元の論語論仁論を引く

○我を離れよ

○難あり有りがたし　四首

○心は磐石の如くおし靜め、氣分は朝日の如く勇しかれ　三首

○怠らず御陽氣を吸へ

○神の分心を痛むな

○養無　説明

○善人の罪をも作るな　説明

○心誠則神明感應　二首

○大和心　説明　二首

中流失舟一瓠千金　時機會

○積善之家必有餘慶

○有陰德者必有陽報

○國治則民安、國亂則民流離

○汎愛衆而親仁

神道黑住敎の十三題に因りて左の廿三首を詠む

○活し上手に成れ　五首

○無念に成れ

○誠をとりはづすな

○取越し苦勞をすな　二首

○疑を去らずば御蔭顯れず

○臆病除かずば御蔭顯れず

合下下語成上上用　あと見よそわかの書の由來　川瀨師より承る蘇婆訶の解釋

○後見よそわか二首。前見よそわか二首

佛道大集經の十來の句を題として左の十二首を詠む

○端正者忍辱中來　二首

○富貴者善根中來　二首

○高姓者禮拜中來

○卑賤者驕慢中來

○瘖啞者誹謗中來

○盲聾者不信中來
○長壽者慈悲中來
○短命者殺生中來
○諸根不具者破戒中來
○六根具足者持戒中來
○天空開豁の氣象あれ
○みるめかるかたぞあふみに
　無しと聞くの句を借りて
○身は心に任せず　三首
○無學禪師の釜かけて見よけ
　ふは無事なりの句に效ふ
○神佛擁護

○敏則有功　太田道灌の短慮
　不成功と對照して演ぶ　兼
　好法師の金言
○滑床の瀧を見る　俳諧歌
○今ぞ知る阿波の鳴戸は涙風
　も無しといふ句に感じて
○あはうになれ　題意を說く
　あはうに成りて危難を遁れ
　し實話二件
○忍耐は寶なり　易經を引く
○從心所欲不踰矩
○舊友の訪問を喜びて

○遠國の友に贈る
○或る人の子を喪へるを慰め
　むとて、念佛稱名を宗として
　恩愛のきづなを忘れさせ給
　へといふ
○大乘。　大乘小乘悟覺の說明
○人、死を嫌ふより聯想して、念
　佛を厭へる方あり
○大道本來無所染
○白雲那得有心期
○見其參於前　石川先生の忠
　信篤敬の講義

○念佛を信ずる功德にて、重く
　受くべき病をも輕く受く。
　法然聖人の金言
○定水を凝らすと雖、識浪頻に
　動く。　他力法門の說明
○人間に住むこそやかて淨土
　なれ　說明
○身の往生よりも心の往生。
　法然聖人の金言
○老いのさま　二首
○生死即涅槃
○生も死も佛の御いのち　二

首

○君子無不自得　五首

○心清ければ國土清し　三首

○心造如來、　四首　華嚴經十行品の偈を引く

○幸福無疆

○得失苦樂　十首

第二、婬慾の誡。　第三、財慾の誡。　第四、苦を忍ぶ。　第五、結局成敗を天に任かする說。　第九、初より苦を生ぜざらしめよ。　堀先生さとりの語原

○居ながら月花を見て　二首。

此は心學の歌をはし書きとす

○情歌をはしがきとして

○在纏之中有出纏之道。　三首

○慰安の悟道　四首

布演

○解脫煩惱出離生死　十首

苦樂は妄想なる說。

實相無相也、故不生不滅也。

法華經の是法住法位の解釋。

不斷煩惱而得涅槃

○老いず死なずの藥もがなといふ人に與へむとて。　二首

生は生に任せ、死は死に任せ、願ふ心もなく、厭ふ心もなきが、佛の境界なり。

○境界は心に從ひて起る。　三首。　黑住宗忠師の金言。　岸澤惟安師の金言。　米田順誓居士の金言。

○人、財寶を身に有つとも、心に苦みと畏れと無きに及ばず。　二首。

度一切世間苦惱佛。　壞一切世間怖畏佛

孔子曰、君子不憂不懼

○照見五蘊皆空度一切苦厄

四首

五蘊乃色受想行識の解釋

○色即是空

眞諦門即平等界

人空法空の說明

○空即是色

俗諦門即差別界

○不斷樂者名爲苦。　以斷樂

故無有苦。　三首。
涅槃經を引く
○無苦無樂乃名大樂
○至樂無樂。
莊子を引きて説明す
○以無苦爲樂　三首
○無患曰樂
大戴記を引く
○未見佛性者名煩惱身。　涅槃
經を引きて説明す
○極樂淨土
○涅槃即快樂安穩
○辭　世
○述　懷
○先憂事者後樂事
曾子立事篇を引く
○無念は清し妄念は濁る。　起
信論の一章を引く。　心を清
ませの古歌を添ふ
○河水清
○藤原範永朝臣の句を借りて
詠む
悟道歌凡百八十八首
御製を恭しく掲ぐ

悟道歌　安心長壽の道

阿保友一郎述
石川正作校

艱難憂戚成汝于玉　二首

うき事に遇ひつゝ笑ふますら雄は、心を試す資けとぞ觀る
憂き事に堪へ忍び來て今ぞ知る、辛苦艱難おのが身の爲め

題は宋の張横渠の句なり。　戚は憂也惱也イタムと訓ず。　詳細は卷末を參考すべし

君子無入而不自得焉　（中庸に見ゆ）

うき事にあふ世なれども歎くまじ、心を磨く資けとも觀ば

經籍纂詁に云はく、得猶足也。　莊子翼の羅勉道の註に自得心自安也と。　乃心中自安みし足れりと思ひて暮すことなり。　尙卷末を參考せよ。

君子居易以俟命

はからはぬ心ぞ易きむら雨の降るも晴るゝもそらに信せて

中庸に小人行險以徼幸と對句せり。三祖大師の信心銘に至道無難、唯懷揀擇と。見眞大師曰はく、他力法門の奥義は彌陀の願力に信せて、行者の義はからひなきを義わけすちと。黒住教には人智を去りて天に任せよ、とあり。

仁人之安宅也義人之正路也（孟子の句）

仁と義と身に有ち得ば憂ひなく世に懼れなく惑ひなからむ

君子見幾不如舍

後悔を先に立たする智慧問はば、能くきざし見て取捨するに在り

題は易經に在り。幾の解は卷末に出す。

不遠復无祇悔（易經に見ゆ）

くいと見ば遲れず復れ、まが事も、はやく氣附かば吉と變らむ

居樂見苦兆爲智

止めやめぬきざしの見ゆる智慧いづこ、慾に迷はぬ心より出づ

患生於多慾。慾は目を盲ます。

在止於至善（大學に見ゆ）

舍めやめぬ兆の見ゆる智慧得るは、至善目あてに思ひ慮へ

君子見幾而作不俟終日（易經）俳諧歌

きざし視て時をおふ（追ふと大とをかぬ）根のたふとさは漬物にても悟られにけり

後悔先に立たず　十二首

後悔を日先に立つる仕方には、人にも謀りあやふきを闕く

論語の爲政篇に多聞闕疑愼言其餘則寡尤。多見闕殆愼行其餘則寡悔と在り。

人に謀り吾が智を益さむ心あらば、己をしばしおろかとも爲よ

後悔が目先に見えぬ邪魔ものは、吾が智慧頼む曇りなりけり

いくたびもそら見定めて船出せよ、乘り懸れば、といふ事の憂き

易經に曰はく知進退存亡而不失其正者、夫唯聖人乎と。又曰はく亢龍有悔。亢之爲言也、知進而不知退。知存而不知亡。知得而不知喪也と。

さりともと急きな渡りそ顧みよ、欲しき惜しきの世の思ひ川

思ひ川は筑前の國にあり。禮記の曲禮上に云はく傲不可長欲不可縱志不可滿樂不可極と。

澄めりともをしみ酌まなむ岩清水、足るを望まば濁りもぞする

（左の二首は光明皇后佛足石の歌調に倣ふ）

後の悔なからむことを願ひなば、惜む心をしかと離すな取りて忘るな

吝めとは人に施す時ならず金まうけむと本手出すとき株券人に勸めらるゝ時

大學に曰はく生財有大道、生之者衆、食之者寡、爲之者疾、用之者舒、則財恒足矣

後悔を先に立たせて見らるるは、世に幸福を得たる人なり

寐て待てど暮せど更に何事の無きこそ人の果報とも云へ

俚言に果報は寐て待てと云へり。果報とは幸福を云ふ。寐て待ちて幸福を求むるに非ず。寐て待つ事を得るが取りも直さず幸福なるなり。世間には何事もせずして生活に困らぬ身なるに、慾の間違ひにて株券に手を出し、大損を致し遂に身を隱すたぐひ例多し。莊子に明言あり至樂篇に云はく、吾以無爲誠樂矣。又俗之所大苦也。故曰至樂無樂と。

心から心に物を思はせて、輪索を造りて羅り苦む。

自縄自縛

貪慾は身を苦むるわざなるぞ、狐ばかりとおぼしめすなよ

佛祖三教に云はく、愛慾莫甚於色。色之爲慾其大無外と。つら〳〵世の中を懷ひめぐらすに、愛慾の爲に青年の心中する者新聞紙に無きに非ず。愍むべきは年往きて三四人の子が出來て家に餘裕なきに、一旦病に罹り子を養ふ手段盡き、遂に親子共に死するものあり。昔ある士族四五人組みて贋札を作り、露見して自殺したる事あり。その根源を尋ぬ

れば皆是婬慾が本なり。蜀山人の狂歌に、韓信にあらねどとかく堪忍はさてこそ人の胯くらにあれ、と。けだし婬慾が因と成り酒が縁となり、忍耐辛抱せざるより終に取り返へし成らぬ大事に至るなり。止觀に云はく、五慾は人を率ゐて魔境に入らしむと。大論に云はく、五慾の中に觸を第一とす。能く人心を繫ぎ縛る。人の深泥に墮ちて救濟し難きが如し。餘慾を受くる若きは猶智慧を失はず。婬慾に會ふ時は身心昏迷して省覺する所なし、深く執着して自沒すと。誠に深慮すべき事なり。心せよ世の人人よ戒たもて、五戒有たば罪畏れなし。酒飲めど酔ひを求めず精氣をも肝要の外決して漏すな。

世紛無盡過眼空
うき事をなに歎くらむ世の中の嬉しと看しもつかの間なれば
生事不豐隨意足
世の中に貧富貴賤の授りも思ひやうにて苦が樂と成る

右の二題は、唐の謝幼槃が陶淵明寫眞圖に題せし句なり。古文眞寶前篇に見ゆ。

人間萬事塞翁馬
さめし後何か惜まむ芳野山花の盛りをうたた寢に見て

人間萬事塞翁馬、推枕軒中聽雨眠は、元の僧元熙禪師の作れる七言律詩の結句なり。葛原詩話に詳なり。塞翁馬の事は淮南子に在り。淮南子の人間訓に云はく、夫禍福之轉相生、其變難見也。近塞上之人有善術者。馬無故亡而入胡。人皆弔之。其父曰、此何知乃不爲福乎。居數月、其馬將胡駿馬而歸。人皆賀之。其父曰、此何知乃不爲禍乎。家富良馬、其子好騎。墮而折其髀。人皆弔之。其父曰、此何知乃不爲福乎。居一年、胡人大入塞。丁壯者引弦而戰。近塞之人、死者十九。此獨以跛之故、父子相保。故福之爲禍、禍之爲福、化不可極、深不可測也。

一日之計在乎早旦
寢覺めせばひと日の事を計り置け、後の悔なきしわざなるべし
一寸光陰不可輕
吾が齡とてひと日の外に更になし、きのふは過ぎつあすはまだ來ず

題の出所を忘る。佩文韻府に梁元帝纂要に云はく、一日之計在於晨、一年之計在於春と。

宋の朱子が勸學詩に、少年易老學難成。一寸光陰不可輕。未覺池塘春草夢。階前梧葉已

成年不重來一日難再晨　二首

文を讀むいとまあるこそたふとけれ、磨かで過す人惜しきかな

省みてをしくもあるか、世に生れ益なき事に月日過すは

題は陶淵明の詩の起句承句なり。轉結は及時當勉勵歲月不待人とあり。

流水不腐戸樞不蠹　二首

氣血をば朝な朝なに運さむ、よはひを延ぶる道と悟りて

身と心苦みなくて働くは、齡を延ぶる道にこそあれ

題は呂子春秋の盡數篇に在り。蠹を螻に作れり。

君子惜精　二首

長生きの道を尋ぬる人しあらば、精を惜むにありと答へむ

精液を惜み漏すなの意。

身を倒す斧とし聞けば警めよ、惜むは啻に心のみかは

精神の苦勞を惜むばかりに非ずとの意。

悟道と導引とは長壽の法

悟り得ば身に添ふ苦勞遁るべし、朝な朝なに氣血めぐらせ

仁は人を相け偶ふなり

つれもてる旅路は心安らけし、世はなさけ(仁)とは豫て聞きしか

皇清經解の論語論仁論に、清の阮元曰はく、仁者謂相人偶之也。人與人相偶而仁乃見也と。

積善之家必有餘慶

世の人を助くる人に神ほとけ代り報ゆるものとこそ知れ

題は易經に出づ。積不善之家必有餘殃を次句とす。

有陰德者必有陽報

人の爲め盡すわざこそ賢けれ、身に報いずば終に己むべき

劉向說苑の貴德篇に出づ。次句は有隱行者必有昭名」

國治則民安、國亂則民流離

もろともに世のなりはひは重くとも、皇國を思ふ心輕むな

汎愛衆而親仁（論語に見ゆ）

ちかづかば智者に學者に福者醫者、益得ることの多きものなり

「左の十三題は、神道黑住教に據る」

活し上手に成れ　五首

廣き世に思ひ運し比べ看よ、災難苦惱受くる多少を

くらべ看て天を恨みず感謝する人をば活し上手とはいふ

恨みなく心のどかに喜びて過す人こそ神に協はめ

神慮にかなふの意。のどかには、靜におちつきてゆったりとの意なり。

慾淺く恨み少く苦の中に樂を見る人活し上手か

足るを知るゆゑに災難遁るれば、慾少きも活す道なり

無念に成れ

夢見ずに永く眠りて寤むる朝、無念無想の德を悟らむ

誠をとりはづすな

交りて僞りを忌み誠ならば、神は好して幸を與へむ

取越し苦勞をすな　二首

兩傘を持つ身ぞ易きむら雨の降るも晴るゝも苦勞なければ

船人の漕ぐに任せて睡らなむ、心せくともかひのなければ

疑ひを去らずば御蔭顯はれず

疑ひを去りて心に決定の成り立つ人を神は扶けむ

臆病除かずば御蔭顯はれず

物に恐ぢ事に進まぬ卑怯もの神はいかでか祐け給はむ

我を離れよ

かみながら清き心を尋ぬれば、人我へだての無きをいふなり

難あり有りがたし　四首

世の中に艱難苦勞せぬ人の安樂知るといふは信ぜず

徳川家康公云はく、艱難を常と思へと。

安樂は苦勞してこそ知るを得れ、苦勞せぬ人知る由もなし

好しき事ならねども、艱難は人が苦勞を知る藥なり

艱難に出逢はぬ人は、交りて人の苦勞に氣附かざるなり

心は磐石の如くおし靜め、氣分は朝日の如く

勇しかれ　三首

何事も心靜におちつきて、勇み進みて時機をはづすな

おちつけと事なき日には我いはず、起りし時にいつも肝要

事起りうろつくからの災害は、靜心にて遁るるものを

怠らず御陽氣を吸へ

朝ごとに新しき氣を吸ふ人は、疾むてふ事の數も少し

神の分心を痛むな

授らぬ身をも悟らで、怠りの上に心を痛め苦む

福の授らぬなり。此の痛むなは、他動詞にて、痛め、痛め、痛む、痛むる、痛むれの第三轉の痛むになを附けしものにて、通常にては痛めるなといふ。

養無

黒住教祖云はく、無を養ふとは、我を離れて神人一體と成るなり。

我といふ心を捨てて、天の道誠一つに成らむとぞねがふ

善人の罪をも作るな

莊子が爲不善乎顯明之中者、人得而誅之。爲不善乎幽暗之中者、鬼(神)得而誅之と云へる以外の罪なり。けだし善人なれば、他人に對して不善を行ひ人を苦むる事を爲さざれとも、

我と我が心を苦むる事あり。是とても罪を造る一端なりと戒め置かれき。

世に處して悟り心の薄き時、おのが心を痛め苦む

心誠則神明感應　二首

濁りなき水に月影宿りけり、神は誠に通はざらめや。

見えずとて神いまさじと思ふなよ、誠ある身に添ひ護るなり

煩惱障眼雖不見、大悲無倦常照我。

大和心　二首

黒住宗忠曰はく、陽氣に成れ春の氣に成れ、爽快剛健に成れ。陽氣ゆるむときは陰氣つよるとぞ。予今之を以て本居宣長大人の敷島の大和心を人問はば朝日ににほふ山櫻花と詠じ給ひし解釋にあつべきものと考ふ。

あめつちの神に通へる眞心は、我がしき島のやまとだましひ

我をおきて皇國に盡す誠こそやまと心といふべかりけれ

中流失舟一瓠千金。　時機會合下下語成上上用

昔文政五年午歳の頃、東都忍が岡に藤本常丸といへる人、金の生る樹後見よ蘇和歌といふ書を述べたり。その書にそわかといふは、物成就の義と在り。今そわかの義に付き明に承りたく思ひ、川瀨師に質問すれば、乃、織田師の佛教大辭典を始め般若心經贊、心經顯正記までも引きて示されたり。けだし蘇婆訶は眞言の結句にして、五義も六七義もあり。予の思考する所にて專門家外の人にも記憶したくある解釋は、警覺の義、息災增益の義、速疾成就の義の三とす。今その題に效ひて二首を詠み、又前見よそわかの二首をも添ふ。

人を訪ひ帽子忘れて立ちもどる、時費えたりあと見よそわか

人を訪ひ路の歸りにそら晴れて傘忘れたりあと見よそわか

道普請の立札見ずに車引き、止められかへるさき見よそわか

懇意なる友の番地を筆記せず、通信困るさき見よそわか

川瀨良琛師大方等大集經の第三卷より十來の句を示さる、乃、之を題にして道歌を詠む

一、端正者忍辱中來　二首

前の世に堪忍多きその報い、あと見よそわかすがたうるはし
さきの世に怒り腹立つその報い、あと見よそわか今の不器量

二、富貴者善根中來　二首

さきの世に善き種蒔きしその報い、あと見よそわか今の安樂
三寶に供養成したる善根に、あと見よそわか福德の人

三、高姓者禮拜中來

過去の世に禮拜恭敬せし功德、あと見よそわか高貴とぞ成る

四、卑賤者驕慢中來

前の世におごりあなどるその報い、あと見よそわか今は貧賤

五、瘖啞者誹謗中來

さきの世に經法謗りし報いとぞ、あと見よそわかおしに生るる

六、盲聾者不信中來

さきの世に教訓信ぜぬ報いにやあと見よそわか目くらかつんぼ

七、長壽者慈悲中來

さきの世に慈悲心深きめぐみにて、あと見よそわか今の長命

八、短命者殺生中來

さきの世に殺生好みし報いにて、あと見よそわかいのち短し

九、諸根不具者破戒中來

さきの世に戒を守らぬ報いにぞ、あと見よそわか不具に生るる

十、六根具足者持戒中來

前の世に戒をたもちし六根は、あと見よそわかいつも全し

六根とは、眼、耳、鼻、舌、身(觸)、意の本源をいふ。

天空開豁(ホガラカ)の氣象あれ
世にはいふ貧ちや有德ちや苦や樂と呼吸が終ればなにもかも無

し

見日借方身
みるめかるかたぞあふみに無しと聞くの
海松和布刈潟淡海

句を借りて詠む　俳諧歌

見日海
世のみるめ貧富苦樂の別ちあれどをふみの末は無しとこそ知れ
海松淡海

題の下の句は、玉藻をさへや蟹は潜かぬ(後撰集に在り)

身は心に任せず　三首

我がままに成らぬを知らで馴れそみて歎き哀むことぞ拙き

近すぎて知らぬ事こそをかしけれ、己が眸にまつ毛見えねば

近すぎて聞かぬといふぞをかしかる、おのがいびきを知らず寝ぬ

れば

無學禪師の釜掛けて見よけふは無事なりの句に效ふ

世の中は思ひのままに成らぬ身と落着きてこそけふは無事なれ

神佛擁護

うへもなき寶といふとも神佛守れる幸にあに勝らめや

敏則有功　(論語に出づ)

いそぎなばぬれざらましを、旅人の後れて出逢ふ野路のむらさめ

此は昔太田道灌の短慮不成功の題にて詠める、急がずばぬれざらましを、旅人の跡より晴る、野路のむら雨の反對なり。(ましといふ助辭は、第一轉を受く。まじは、第三轉を受く。混同すべからず。ましはウモノと譯す。ぬれざらましは、ヌレズアラウモノと譯す。あゆひ抄に委し)凡て物事は先じて功あることあり、後れて功あることあり。兩樣の場合あれば、君子はその機に臨み變に應ずる智慮なかるべからず。友人丹羽弘君存生中、急ぎて功ある事をも言ひしかば、兩人して歌をまとめしなり。兼好法師曰はく、あやまりといふは速にすべき事をゆるくし、ゆるくすべきことをいそぎ過ぎしことのくやしきなりと。宜なるかな。或る人問ふ。古歌に、もののふの矢馳の渡し近けれど急がば廻れ瀬田の長橋とあるはいかが。答ふ、是は船中若一の危難あらむ事を慮りて詠みしなり。

舍弟繼八郎が伊豫の宇和島に在勤せし頃、三里隔りたる滑床の瀧を見むとて愛弟始め五人連れにて險しき山阪を攀ぢ登り風雨に逢ひていと辛き目を見たれば

なめとこの四字をよみ入れて
世の中に辛きをなめてとことはに堪ふる人こそたふとかりけれ

今ぞ知る阿波の鳴戸は涙風も無しといふ句に感じて
悟り得れば心の涙も靜なり、世の荒海を凌ぎ渡りて

あはうになれ

黒住教祖の格言中に在り。それ人に教へて賢くなれといふこそ普通なれ。しかるにあはうに成れとは解しかねたり。さて八十の年を經て漸く悟ることを得。それは或る場合を謂ふならむ。凡そ生涯に二三度入用の時期あらむ。その時期は容易ならざる大事の時節なるべし。

常になき事にはあれど、或るばあひあはうに成りて危難まぬかるる

予と年齢等しき青年某氏あり(名を揭ぐるを忌む)舊藩の劍術道場にて仕合ひせし事あれば知り人と成れり。後王政維新に際し津藩に東征の役ありて某氏等も從軍し戰功ありと聞く。久しく面會せず。明治三年夏の頃と成りて、某氏が時習館の寄宿舍に居る事を聞きしかば、或る日訪問するに、某氏の衣服絹を着て昔日の質素に異なれば、予直ぐ心に浮べり。是は彼妓樓に遊ぶ故に自然に花美を粧ふなるべしと。而して雜談の半に、時に阿保君よ、金なきを憂ふるに及ばず。容易に得らるゝ方法あり。もし御望みならば懇談申さむと云へり。予聞きし刹那に心に浮べり。是は彼が遊蕩の費用に窮せしより贋札などを工夫し居るならむ。危し危し迂闊に口を開くべからずと思ひて默せり。彼は不興氣に感じけむ。坐傍の友を顧み一拳やらうとて拳打ちにかかりたれば、それを機會に辭して歸りき。按の條、後に贋札の事露見して、その年の九月に彼は餘儀なく兄の家にて自殺し、その連累四名も士族ゆゑ相前後して自害したりと聞く。又津藩に門田九郎といふ智者あり。我等とは遙に年長にて、時々石川靖齋先生の講話を聽かれしかば交際せり。不癡不聾則不爲家翁と云ふ語に本づき痴聾齋と號せらる。是の人津藩の監物騷動の起る時から發狂して、治る後に疾癒えたりと聞く。痴聾齋の號徒然に非るなり。世の中を渡り比べて今ぞ知る阿波の鳴戸は浪風もなし、と實に感慨無量なりけり。

忍耐は寶なり

たふれても立つは起き上り小法師と、蜘蛛の餌張りにためるらんかな

タメルランは蒙古王帖木兒なり。易經に曰はく窮則變、變則通と。窮極也困也。通達也不滯也。又云はく物不可終否、故受之以同人。物不可終剝、故受之以復と。剝落也。

從心所欲不踰矩

飛ぶ鳥の空にしをりはあらねども、歸る翼は迷はざりけり

題は論語の爲政第二に出づ。

舊友の訪問を喜びて

いにしへも今も變らぬ色見せて勾へる花や誠なるらむ

遠國の友に贈る

さちあれとかたみに祈る眞心は、神も宜なひ守り給はむ

かた身には互に、うべなひは同意して也。

或る人の子を喪へるを慰めむとて念佛稱名を宗として恩愛のきづなを忘れさせ給へといふ(きづなは引き綱の略か)

生き死にを出雲の浦に船出して、心、子戀ひの森を忘れよ

子戀ひの森は、伊豆の國に在り。

大乘

咲けば散る散れば又咲く春雨の花の姿や常住なるらむ

是はある淨土宗の僧の詠めるいろは道歌三百首の中に在りし五句目の無常なるらむをば、常住なるらむと改めて出しゝなり。二乘の小乘にては短距離に見て無常といひ、一乘の大乘にては長距離に見て常住と云ふ所の相違なるのみ。けだし花は咲く咲く常住、紅葉は散る散る常住といへるは、長距離卽長時間をながめ證りての事なりとす。

人死を嫌ふより聯想して念佛を厭へる方あり

稱名を嫌ふ人こそおろかなれ、無量壽覺の譯聞かずして

大道本來無所染

汲みし跡はや忘井の水鏡そこに映ろふ影だにもなし

忘井は伊勢の國に在り。

白雲那得有心期

待ちわぶる心の惱みうち拂ひ雲の往き来をながめてぞ清む

右二題は唐の張喬の句なり。心無執着則身無繫縛。

見其參於前

人に逢ひ語らふひまも道を懷ひ善し悪しに附き照し見なばや

論語衛靈公篇に孔子が子張に教へて曰はく、言は忠信なれ、行は篤敬なれと。吾が師石川靖齋先生の講案に曰はく、忠とは我が中心の誠をうち出して人の爲に親切を盡す事。信とは言行相違せず假にもうそ僞りを申さぬ事。つづまる所、律義といふが如し。又篤とは篤厚篤實などとつづきて物事を粗末にせず慇懃丁寧なる事。敬とは崇敬畏敬とつづきて萬端の上を大事にかけ、うやまひ慎む事なり。しかしよき言行にても一旦にはその效驗を得ること難し。忠信篤敬の行も不斷常住念々時々刻々怠らず心掛けて、立則見其參於前。在輿則見其倚於衡也。夫然後行と。立つときは身に立ち添ふが如く、車に在るときは、その横木に倚りかかりたるやうに思へとまで示されたりき。參は康熙字典に云はく、叢立貞、又參錯也、參列也と。經籍纂詁に參猶森也と。

念佛を信ずる功德にて、重く受くべき病をも輕く受く

法然房源空聖人の淨土宗略抄に、念佛を信ずる者には轉重輕受といひて、宿業ありておもく受くべき病をも、かろくうけさせ給ふ。と見ゆ。

稱ふれば病も癒ゆと聞くからは、現世の利益いかで空しき

定水を凝すと雖識浪頻に動く

稱ふれば安心定るものと聽き、はからひ止めて信じたりけり

(再出)他力法門の奥義は、彌陀の願力に信せて行者の義(はからひ)なきを義(わけすぢ)とす。題は親鸞聖人繪詞傳並に存覺上人の歎德文に出づ。

人間に住むこそやがて淨土なれ

ひと日だに住む此の世をば極樂と思ひて暮せ心ばかりは

題は親鸞聖人の御詠歌に基く。もし畜生界に生れしならば、いかでか悟覺の道を聽く事

を得む。

身の往生よりも心の往生
身の終り誰も懐ひに任せねば、速く淨土に住ませ心を

題は南條文雄師の言。法然聖人曰く、往生とは悟道得法の異名也と。

老いのさま　二首

年々に老いて稚(ワカ)く成りにけり、足進みかね物忘れして
歳老いて耳聞えかね目も暗し、老耄と書きまた聾盲と書く

生死即涅槃

老い病みて痛くなわびそ、むかしより生れて還る人も多かり
生も死も佛の御いのち　二首

承陽大師の正法眼藏に見ゆ。

生れしも我ならなくに年老いて死にを歎くぞおろかなりける

生き死にの往き來佛に任せなむ、心のままに成らぬ身なれば

君子無不自得　五首

世の事は心のままに成らねばと、笑ひ清ますぞ覺りなりける
身のみかは心も我のままならず、夢看るたびに思ひ知りけり
ままならぬ事を歎くは凡夫なり、悟り笑ふや君子なるらむ
覺りとは心開きし更へ名なり、開かぬ人や命縮めむ
氣と心淡く使ひて苦に疾まじ、身を安みして足るを知りせば

心清ければ國土清し　三首

足ると思ふ心の奥に淨土あり、慾寡きを清しともいふ
心だに清くばやがて淨土なり、ほとけもかみも往き來ます
歳老いて慾も苦樂も薄らげば、清き心に成りしかと思ふ

題は維摩經に倣ふ。

心造如來　四首

華嚴經十行品の偈に云はく、若人欲了知三世一切佛應觀法界性一切唯心造。又云はく應當如是觀心造諸如來。

十法界此の世に在りと聞きしより、淨土に心住ませむと念ふ

十法界とは佛陀、菩薩、聲聞、緣覺(四聖)天上、人間、阿修羅、餓鬼、畜生、地獄(六凡)をいふ。

授らぬ身には安養缺け易し、心ばかりを住ませつるかな

悟り得し心に擇べ世の中は、穢土魔界とも又淨土とも

ひと日だに苦なく樂なく過しなば、けふは淨土に住むとこそ思へ

幸福無疆

人のさちあまたあれども、世の眞理覺り得たるに上なかりけり

得失苦樂　十首

無明とて心に光ささぬ身は、貪慾邪見の覆へばなりけり

道ならぬ事を巧みて樂みと思ひの果ては苦みと成る

道ふまぬ事を謀りて得益と思ひの外に損失と成る

第二は婬慾の誡めなり。第三は財慾の誡めなり。凡世間の人、是の希望を遂げむと欲して、道理を律義に守らぬより、その結果、苦惱に罹りて病み煩ひ、或は意外の損失に逢ひ身を果す。警戒すべきことなり。

道まもりこらへ忍びて、苦みと思ひしする忍は樂みと成る

人能く道理に循ひ守りて、世の艱難辛苦に堪へ忍びなば、行く末終には安樂の好果を得べき事必定ならむ。

義に盡し疲れありとも苦に病まず、成ると成らぬは天に信せよ

人の苦惱は必しも慾のみに限らず。世の中ある義理の爲に心身を勞する事多し。日夜に苦勞し配慮すべしと雖、をり〳〵は餘地を存して精神を養ひ神の分心を痛めぬ樣に樞取るべし。結局は成敗を天に任せ度外に置くべき雄大なる胆力なかるべからず。さなくては大丈夫に非ず。唐の杜牧が烏江亭に題する詩に、勝敗兵家事不期、包羞忍恥是男兒

と云へり。人世不如意者、十中常七八とも聞けり。黒住教祖云はく、ままならぬこそうき世なれと、思ひ分くるぞ悟りなるらむと。分くるは分けほどきてあきらむる意なるか。

ままならぬ憂き世のさまと悟り觀て命に信せて笑ひ過さむ

慾淺くわが非を知りて誠あらば擁護の光認められなむ

苦は絶えず附きまとふめり、みほとけの道にたよりて悟り遁れむ

樂みと掛りて後に苦みの種と成らむぞ多かりき、行ふまへに深く慮へ

此の一首は佛足石の歌調。それ身に羅れる苦惱を除く必要もあれど、後の苦惱を生せざらしむる事も固より肝要なり。もし初に苦惱生せずば、之を除かむとする用も無かるべし。第九は早く因果の理を諦めて、初に苦惱を生せざらしめむと希ふなり。

悟りなば苦に成るまじを、苦と見とめ我と苦にして我を苦む

堀秀成師の音圖大全、並に古言類韵に云はく、さとるといふ詞はさにするどくあらはるる象あり。とるは取り得るなりと。予是の説に隨ひ言を添へて云はく、さはするどく觀あらはすなりと。

ある心學の歌に富士の山夢に見るこそ果報なれ、路銀も要らず草臥れもせず(果報は幸福の意なり)と。今是の歌に因みて詠む。

居ながら月花を見て　二首

更科に往かで詠むる今宵かな、夢に芳野を分け登る春

やど近く芳野の春を詠めなむ、花のひと木を數に看做して

待つ宵にふけゆく鐘の聲聞けば、あかぬ別れのとり(鷄聲)はものかは　知らせばや月かたぶける寒き夜に、逢はで空しく歸る心を。是の二首は情感より看るときは名歌なれども、婬慾に耽りて苦樂を追逐せり。自警むべき事なり。

求めなき心に障るくまもなし、宵も待たねばあけも惜まず

くまとは曲、隈、すみ、かげ、かくれたる處、入り込みし所、くらき事なり。

在纏之中有出纏之道　三首

在纏はつきまとふ也。出纏は遁れ出るなり。

花紅葉たよりに聞けど、老の身のかすめる眼には出でず樂せり

雲閉ぢて空に光は見えねども、心にぞ清む秋の夜の月

高き度の眼鏡にても新聞紙の看難く成りぬれば

見えずとて何か恨みむ、塵の世を遁れて出づる道と悟らば

慰安の悟道　四首

古人の道歌に、夢なりと見るも夢なり、夢の世に夢物語するも夢なり。といへる歌あれど、是にてはたよりなき心地す。釋尊の無量壽經に說き給ひし如く、人の吉凶禍福貧富夭壽は總べて己が前世の宿業の然らしむる所なり。されば毛頭恨み歎き悲むべからず諦むべし。又一の悟道としては、夭壽生死の悲喜を取り拂ふ事なり。その悟道は、早く死ぬれば早く生る。晩く死ぬれば晩く生る。早く死ぬるは哀しけれど、早く生ると思へば悅ぶも可なり。唯自己に前の記憶なきを遺憾とするのみ。人死して中有に一週間あるひは七週間止り、而して後しやば(忍土)に生れて繰り返へすまでなり。しかあれば人宜しく生死の爲に己が心身を苦むること勿れ。夫、生死の爲に我が心身を碍げられず。生死に心身を束縛せられぬをば、生死卽涅槃とはいふなり。涅槃とは不生不滅の理を證りたるを謂ふ。けだし肉身は現世の借り物にて、眞如なる心こそ貴き吾が物なれ。死は月に叢雲のかかれるが如し。

宵の間にかかりし雲はいづくぞと、知らぬ顏なる夜半の月かな

いぬる間はいかで夢かと悟り得む、覺めて後にぞ夢と知るのみ

死を歎き生を祝ふぞおろかなる、死にぬる果ては生れしに因る

往く先きをまづ諦めよ、死ぬる時歎きのあるは暗きゆゑなり

解脫煩惱出離生死　十首

生き死にに心引かれて歎かずに、廣く思ひて解脫をも得よ

過ぎ去りし跡は苦もなく樂もなし、憂き嬉しきもつかの間にして

夢の世といへる言こそまことなれ、過ぎし昔の跡かへり見ば

物事をなにのへちまと苦にせずば、悶ひ解けて熱さがるなり

世の中を兒戯の如しと悟りてぞ、苦なく樂なき淨土なりける

宋の戴復古が七夕の詩に、從來世事皆兒戯。不獨人間乞巧樓。

生き死にの道を心に覺りなば、うき世は兒戯に等しかるらむ

苦と樂と一つに見ゆる覺りあらば、身に生き死にの惱みなからむ

岸澤師云はく、吾らは生きたる時から淨土に居るなり。苦もなく樂もなし。苦樂は畢竟妄想なり。妄想がなくなれば苦しきしやば(忍土)に非ず。けだし心清くば國土清し。穢土と思ふ根性が無くなれば、此の世界は淨土なり。

生き死にを何か喜び悲まむ、眞如往き來の身とし悟らば

實相無相也。以無相故不生不滅也。不生不滅即是涅槃也。織田得能師の釋に曰はく、法華經方便品に是法(實相の法)は、住法位(眞如を謂ふ。眞如は諸法の安住する位なる故に)。世間相(諸法)は、常住(實相)なり。

樂に就き苦につきみ名を稱へなば、心の中に淨土浮ばむ

見眞大師曰はく、不斷煩惱而得涅槃。煩惱即菩提、生死(生老病死)即涅槃

なに事もうき世のさまとみ名稱へ、心靜めて落ち着きにけり

老いず死なずの藥もがなといふ人に與へむとて　二首

生き死にをひとつみるめの浦に漕がば、蓬が島も近く成るらむ

みるめの浦は壹岐の國に在り。蓬萊山は不老不死の所なりと謂ひ傳ふ。

生き死にを出雲の浦に船出して、慾にふけひの濱に泊るな

ふけひ(吹飯)の濱は、紀伊の國に在り。

岸澤師曰はく、生死を厭ひ涅槃を欣ぶ間は、解脱すること能はず、生死にも手を拂へ、ねはんにも手を拂へ。此の妄想を除き取捨の心が失せたる時、生死が涅槃、ねはんが生死なり。生に向ひて願ふことなく、死に向ひて厭ふことなし。是の時生死を脱落するなり。涅は不生、槃は不滅、宇宙の眞理は、生ずる事もなく滅する事もなし。生死といふ事とねはんといふ事とが同じ意味にも成る。妄想を除き取捨の心が失せたるとき、生死が涅槃、涅槃が生死なり。生死とねはんとに於て二見ある間は、決して自由の分はなし。生は生に任せ死は死に任せ、願ふ心もなく厭ふ心もなし。それが佛の境界なり、生死を生死に任せたる方ならずば、佛といふこと能はず。修證義に生死としていとふべきもなく、ねはんとして欣ぶべきもなし。是の時始めて生死を離るる分ありと。されば生死それがねはんにて、不生不滅が落着き所なり。

境界は心に從ひて起る　三首

楞嚴經解蒙抄に、孤山云はく心生法生、境從心起也。法生心生、心逐境遷也。

ひと日だに住む此の世をば、極樂と思ひて暮せ心ばかりは

黒住宗忠曰はく、此の世界は極樂淨土なり。何事も一心にて地獄とも極樂とも成るなり。されば何程無理非道の事たりとも、腹を立てず物を苦にせず、只天地自然に任せ置く時は、乃、極樂世界なりと。

岸澤惟安曰はく、人の心持一つで極樂とも成り地獄とも成る。自分の身それが地獄とも成り極樂とも成る。その人の心持ち一つでいかやうにも成る。又逃げやうもなし。大般若經に、衆生の薄福なる淨を以て穢となすと。自分から極樂をば、穢土にして了ふなりと。

米田順誓居士曰はく。心に煩惱あるを穢といひ煩惱なきを淨といふ。別に淨土穢土の境域あるに非ず。唯、人の心に由るのみ。故に維摩經に曰はく、淨土を得むと欲せばその心を淨くすべし。その心淨きに隨ひて佛土清しと。法華論に曰はく、煩惱なき衆生の住處を淨土と名づくと。又曰はく往生を願へる機につきては、宿善の厚薄ある故に、乃、授くる所の法門にても、その機に隨ひて、或は身體の終る時に往生すと說き、或は現世にて往生を即得すとも說ずるなり。（卷末、靜照上人の話をも看よ）

いたづらに身の憂き事を歎くまじ、思ひ運せ仕合せの身ぞ

年々に老い衰へて後の世に淨土設くる智慧ぞ尊き

人財寶を身に有つとも、心に苦みと畏れと

無きに及ばず　二首

法華經の化城諭品第七に云はく、西方二佛一名阿彌陀、二名度一切世間苦惱。東北方佛名壞一切世間怖畏と。

あたひなき寶といふとも、苦みと畏れとなきに豈、勝らめや

（大伴宿禰家持の句調に倣ふ）凡そ人はなべて日日の生計と貪慾とに目暗みて、平生に生老病死の事を省慮する暇もなく、一旦疾に臥して苦み惱み、死に近づきて憂ひ悲むばかりなり。まして是の苦惱を解脫する道を考へ究むるに及ばむや。しかはあれど、その覺悟を存したきものとす。尙卷末の君子不憂不懼の章をも參考せよ。

死ぬる後安養淨土と定めなば、世に畏るべき事はあらじな

照見五蘊皆空度一切苦厄　四首

五蘊とは色受想行識なり。蘊は積聚の義、生滅變化するものを類集して五種とせり。色とは形あり色あるもの。乃青黃赤白黑などの色彩を顯色といひ、大小長短圓角などの形象を形色といふ。總べて物の形質あるをいふ。今心に對して身を指すなり。受とは感覺と感情とに分つ。今ペインの心理學の知情意に充つるときは感覺は知に屬し、感情は情に屬す。想とは事物の相をば心に浮ぶ取像の義と釋す。受の感覺に由りて受け入れし者を再現して心に見る所の作用とす。されば想像理想觀念概念構造創造などの類にして知力の重なるものなり。行とは或は心理學の知情意の意志に充てて執意力に由りて進み取る心の働き也とすれども、佛典に據るときは、行とはオコナヒ、シワザにて身口意の行作を謂ふ。內心が外境に趣く事をいふ。內心涉境說名爲行(大乘義章三)。起作名爲行(同書八)。行名造作(俱舍三)。造作之心能趣於果名爲行(法界次第上ノ上)とあり。識とは境界に對して事物を了別識知する心の本體なれば、又心の異名なりとも云ふ。織田得能師云はく、識は受想行の根本なれば之を心王といひ、他の三を心所有法即心所ともいふと。尙五蘊を心理學に用ゐて教授せむと欲せば、卷末の參考を見よ。照見の照はサトルなり。

まが事ののぞこり消ゆる寶をば、知らでけふまで過しつるかな

色も空、受想行識、空と觀ば、心に障る一物もなし

觀自在ぼさつの心清ければ、世の禍は附き絡はめや

不老門尋ぬる人に傳へばや、五蘊皆空、額あがるかど

色即是空　俳諧歌　次ぎも同じ

眞諦門即平等界。實相說即本體

笠と成り草履と別るふしの世も、ほどけて見れば竹の皮なり

節　解　分　限　覺

諦とは審實にして謬らぬ義。眞諦は道理決定し眞實にして謬なきなり。俗諦とは世間人人の知れる事相差別の理なり。笠と草履とは形と用とを殊にすれども製造の本をしらぶれば竹の皮なり。又家屋にてもその構造は立派に見ゆれども之を解き看るときは、種々の木材、竹、壁、家根瓦、敷石などに別るるが如し。斯の悟覺をば佛教にて人空と名づく。而してその本と成り材料と成る所の竹の皮にても、又は木材石瓦等にても、更に一歩を進めて悟り觀るときは、空に歸せざることなし。それを空也と悟覺するをば、佛教にて法空と名づく。人空法空の別を知らむと欲する人の爲に玆に聊か贅言す。

空即是色

俗諦門即差別界。緣起說即現象。

人の世はうゑし心のたけの皮、笠とも昇り草履とも下る

不斷樂者名爲苦　以斷樂故無有苦　三首

苦を除け樂は願ふな、世の樂は思ひがけなく苦の種と成る

慾淺く苦なき時こそ樂しけれ、樂を斷たねば苦は絡ひ添ふ

往く末を慮りて樂に惑ふなよ、苦と成ることの多き世の中

題は涅槃經の高貴德王菩薩品に在り。次ぎも同じ。尙卷末を參考せよ。

無苦無樂乃名大樂

ほとけには苦なく樂なし、凡夫には苦の種の樂破壞の樂のみ

至樂無樂

心淺き人に語るな水鏡、憂き嬉しきの影見えずとも

題は莊子至樂篇の語なり。莊子曰吾以無爲誠樂矣。又俗之所大苦也。故曰至樂無樂。

と（二十一頁にも出づ）されば此の樂無しとは、俗人の樂無しとの心意なるか。眞人が眞智を以て樂と見る所と、凡俗の心を以て樂とする所とは、大に雲泥の相違あるものとす。彼の釋尊が樂を斷たざるを以て苦と名づくとのたまひしも、凡俗の樂を指すものなるか。

以無苦爲樂　三首

世の事は苦なき時にぞ樂と知る、苦のなき外に樂を求めじ

往く末を初に量り苦に落ちぬ樂を求めよ、淺くありとも

世の事は苦なき時こそ樂しけれ、淨土といへど苦なき樂なり

無患曰樂

破壞ならぬ樂とは別けて身にはなし、心に苦なくうれひなき時

大藏記の小辨に無患曰樂と在り。

未見佛性者名煩惱身

破れざる身とは金剛法身ぞ、佛性を觀て得るものと聞く

題は涅槃經の純陀品の句なり。夫、佛性を見ること能はざる者は、煩惱身雜食身破壞身な

り。之に反して佛性を見ることを得たるものは、法身金剛身破壞ならぬ身を得べきなりと。是は前の歌よりは遙に歩を進めたり。

極樂淨土

極樂を至樂とも釋く、淨土とは苦なく樂なき涅槃界なり
涅槃卽快樂安穩

あたひなき寶といふとも極樂を悟る心にあに勝らめや

辭　世

淨土には永く樂しと聞きつるにいかで淋しく齡を限るらむ

昭和四年己巳八十二歳にて詠む。

述　懷

八十に八つ迎へし身には悟り得て、淨土に心住ませむとおもふ

昭和十年に詠む。

先憂事者後樂事

吾が樂を後におくりて苦を救ひ衆と樂む是ぞ眞樂

大戴禮の曾子立事篇に先憂事者後樂事。先樂事者後憂事とあり。宋の范仲淹の岳陽樓記の先天下之憂而憂、後天下之樂而樂といふ語は此に本づけり。

無念は清し妄念は濁る

大乘起信論に曰はく、佛無念也。故無生滅流轉。衆生有妄念。以之不免惑業苦之輪回。

ひたすらに心をすませ、妄と無は濁ると清むの代へ名にぞある

ついでに心を清ませの古歌三首を添ふ。

新古今集の釋教に、底きよく心の水をすまさずはいかで悟りの蓮をも見む。千五百番歌合に、にごる世に光さやけきよはの月、心をすますべしるべせよ。夫木抄夏三に、夏の日も心の水をすませとや、浪の蓮に露の涼しき。

河水清

もろびとの心とせばや、みたらひの五十鈴の川の清き流れを

藤原範永朝臣の句を借りて詠む

あり明の月も清水にやどりけり清きをおのが心ともがな

明治大帝の御製を敬ひて仰ぎ奉る

國民もつねに心をあらはなむみもすそ川の清き流に

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな

何とぞ御同樣に清く廣き心にありたきものにこそ。

卷末參考

僅なる悟道歌の册子にて、その卷末まで參考を挿める趣意は、何とぞして彼此聯絡を取り巧に善き方に聯想して得益多からしめむと思へばなり。試に今一例をあげて之を示さむに、莊子の至樂篇に吾無爲を以て誠に樂めりとあるを聞きて、衆人は卒爾に思惟せむ。無爲とあるからは、何事も造作せずにぶらりと日送りするならむと。然あらず。是は無念無想の德を言ひ更へたる也と悟るべし。斯く解するときにはその得益甚多からむ。夫、無念は清く妄念は濁る。佛は無念也、故に生滅流轉なし。衆生は妄念あり、故に生滅流轉惑業苦を免れずと會得せられたし。熟〻思へ、その無念なる釋迦如來は、世に出でて何事も成されざるか。現に衆生を濟

度する爲に多くの教法を說き、多くの菩薩を出し、且、その教法をば二千四百年の後世まで傳へさせられしにあらずや。予が今日普く世人に希望する所の趣旨は玆にありとす。

(一)孟子、告子章句下曰、天將降大任於是人也。(舜、傅說、管夷吾、百里奚等)必先苦其心志、勞其筋骨、餓其體膚、空乏其身行、拂亂其所爲、所以動心忍性增益其所不能と。經籍簒詁云、行猶用也。空窮也。拂戾也。動驚也。忍堅忍也。清王引之曰、此所字可也。又曰人恒過然後能改。困於心衡於慮而後作。徵於色發於聲而後諭。註に云はく、特り上智の人が困に處るに由りて德を成すのみならず。中人の性にても、過ちて後に改め、善に遷るものなり。その平日に過ちを免るること能はず。事勢迫りて心に困めど通らず。慮に横りて順はず。然る後に能く振ひ作ちて改新するなり。機先に於て過ちを免れず。事理著れ人の怒りの色、譏りの聲に驗へて警醒して悟るなり。

(二)入則無法家拂士。出則無敵國外患者。國恒亡。然後知生於憂患死於安樂也。註云、法家以法度正君之大臣也。拂士諍臣也。輔弼之賢士也。生死猶言成敗也。(憂患に成りて安樂に失敗することを知るなり)

(三)孟子盡心章句上に曰、人之有德慧術智者、恒存乎疢疾と。蒙引云はく疢疾猶災患也。人情每快意于安樂、而拂意于困窮、不知困窮乃成德之地也。在心之理謂之德。以理燭事見于未然、是謂德之慧。處事之方謂之術。因事察理盡其當然、是謂術之智と。伊藤仁齋云、仁義禮智之理備、而其用未著、是謂之德。

(四)易繫辭傳曰、幾者動之微、吉凶之先見者也。經籍簒詁云、幾者去无

入有、理而无形、不可以名尋、不可以形覩者也。

(五)中庸曰、君子儻其位而行。不願乎其外。儻富貴行乎富貴、儻貧賤行乎貧賤、儻夷狄行乎夷狄。儻患難行乎患難。君子無入而不自得焉。註云儻向也。入適也。自得隨時隨處各安其所當爲而無不足于心者也。心泰然意也。從容順適之意也。冲夷恬淡(ヤハラギ、タヒラカニ、シヅカニ、オチツキテ)無不足于心者也。經籍篋詁云得猶足也

(六)論語顏淵篇、司馬牛問君子。子曰、君子不憂不懼。內省不疚夫何憂何懼と。註、朱子曰、有憂懼者內有所慊也。自省其內而無所病則心廣体胖。何憂懼之有。仁齋曰、觀於己心無所病則胸中洒然理直氣强。何憂懼之有。石川靖齋先生の論語講案の要領に云はく、君子たる者は、平日何事によらず氣遣ひ心配をせず、事に

おち懼れて引けを取らぬ者なるぞ。孔夫子が他日に君子之道者三。仁者不憂、智者不惑、勇者不懼と申されしと同義なり。司馬牛の人と成り平日少しの事にも心配し心中鬱滯し、事に臨みて心中畏縮せり。曾子が自反而縮雖千万人吾往矣との勇往奮進の氣象に乏しき故に、對症の藥を用ゐられしと見ゆ。それ人自我が行ひを省み、聊も愧づることなく少しも後ぐらき事なきときは、天地に愧ぢず。實に公明正大なり。此にこしたる樂みはあらじ。さればたとひ不仕合にて貧窮なりと雖、君子居易以俟命にて、憂とするに足らずとすと。

(七)村田靜照上人嘗て予に語りて曰はく、昔、法然聖人に善惠坊が後世にて往生する事を信ずと陳ぶれば、それでよしと認可せられ、善信坊が現世にて往生する事を信ずと陳ぶれば、それでよしと

認可せられき。是各〻の機根に應じて答へ給ひしなり。

(八)承るに二乘にては、常樂我淨を四顚倒なり迷ひなりと說き。大乘にては是の四を妙德と說けりとぞ。一見すれば反對の如くなれど、程度に相違あるのみ。予謂ふに一度常樂我淨をば顚倒也と觀ずる所の程度を經過して、然る後に妙德と感ずる境域に進みたるにあらずば、眞成の修業の功を積みし菩薩に非るべし。されば予は兩說ともに必要なりと會得すと申せば、西來寺の僧正辻井德順師之をうなづかる。

(九)神秀上座が身是菩提樹、心如明鏡臺、時々勤拂拭、勿使惹塵埃と壁間に題せしを、六祖はそれを聞き之を踏台として竿頭一歩を進めて、菩提本無樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵埃と偈を誦して衣鉢を傳へられ、衆人その優劣を嘖々せり。されど愚意を以

て之を判ずるときは、假諦を見ると空諦を見るとの差違あるのみ。兩說ともに廢つるに及ばずと申ししかば、永平寺の管院鈴木天山師も之を首肯せらる。然れば兩士を比べて毫も優劣の点なきかといふに是あり。六祖壇經に據るに、五祖謂神秀曰、汝作此偈未見本性。只到門外未入門內。以如此見解覓無上菩提了不可得。無上菩提須得言下識自本心見自本性不生不滅云々。且曰、汝去一兩日思惟、更作一偈將來。神秀經數日偈不成云々。けだし神秀は假諦ばかり見て空諦を案じ出すこと能はず。惠能(六祖)は假諦の上に空諦の偈を現はす。是優劣の分るる点なり。但し右の判釋は經相の次第の三觀より說けるなり。禪宗にては必竟空を說けり。圓融の三觀なれば、假を離るゝ空なく、空を離るゝ假なしといふことを了知すべきなり。夫、宇宙の眞理は

古今に渡り一貫すと雖、人を導く方便手段に於ては、一方を固守せず時と處とを見て爲にする所ありて言ふものとす。

(十)四顚倒とは、正理を顚倒せる見計也。身を計して淨とし、苦を以て樂とし、无常を常と計し、法の无我なるを我と計するなり。一切の色身、自己他人皆不淨なるを反りて淨也とし、內受(意根の受)外受(五根の受)皆苦なるべきをば樂也と思ひ、想といひ行といひ善惡の諸法(法とは道理ありて形なきもの)我に求めて不可得(无所得とも)なるをば我也と思ひ、心王は无住にして今存明失(今日知れど明日忘る)なるをも常住とす。是、原、皆、痴より出づ。涅槃經に曰はく、人於五蘊起四倒見云々、故令修四念處破其四倒と。註无我。凡天地間の事物は眞如を除く外は、悉く因と緣との假和合に成りたるものなり。一も是が主宰たる常住の實我

といふもの無しとす。自體相續を取るをば我見といふ。飜譯名義集に取自體相續名我想ともあり。

(十一)四念處は、四念住に同じ。身受心法の四を所觀の境として、身は不淨なり。受は苦なり。心は无常なり。法は无我なりと觀じ、淨樂我常の四顚倒を對治する觀法なり。身の不淨を觀じて淨の顚倒を破し、受の不樂を觀じて樂の顚倒を破し、心の无常を觀じて常の顚倒を破し、法无我を觀じて我の顚倒を破すといふ。大藏法數に念即能觀之觀、處即所觀之境也。謂諸衆生於色受想行識五陰起四顚倒、於色多起淨倒、於受多起樂倒、於想行多起我倒、於心多起常倒、爲令衆生修此四觀以除四倒故、名四念處也。織田得能師佛敎大辭典に大乘義章を引きて云はく、四倒は四種顚倒の妄見也。之に二種あり。一は生死の無常無樂無我無淨

に於て常樂我淨と執ずるをば、凡夫の四倒となし、一は涅槃の常樂我淨に於て無常無樂無我無淨と執ずるをば、二乘の四倒といふ。初を有爲の四倒と云ひ、後を無爲の四倒といふ。有爲の四倒を斷ずるをば二乘とし、有爲無爲の八倒をも斷ずるをば菩薩とす。

(十二)增註六祖壇經に云はく、傳灯三に無樹をば非樹に作る。何處惹塵埃をば何假拂塵埃に作る。又何處有塵埃に作る。或は爭得染塵埃にも作る。いろ〳〵ありて解釋に宜し。此の菩提は、本無可得相。非色空相。無事物影。此の心鏡も亦無可磨形。實無方圓明暗之影。安有比鏡之相と。非臺は猶言無依と。本來無一物とは卓立無依、靈々不昧。如鳥飛空而不住空、似魚游水而不滯水。從本以來曾無所礙といへり。

(十三)涅槃經高貴德王菩薩品曰、善男子、有大樂故名大涅槃。涅槃無樂、以四樂故名大涅槃。何等爲四。一者斷諸樂故。不斷樂者則名爲苦。若有苦者不名大樂。以斷樂故則無有苦。無苦無樂乃名大樂。涅槃之性無苦無樂。是故涅槃名大樂。以是義故名大涅槃云々。

註に云はく、有爲の樂みにわけむ爲に大の字を置きて涅槃の眞樂を示す。涅槃無樂とは相待の樂なきなり。初は樂なれども終に苦と成るは、多くは娑婆の樂なり。凡夫の樂は苦の種と成るもの多し。悟道歌中に不斷樂者名爲苦など歌彼此ありし故參考に出すなり。二者大寂靜故。三者一切知故。四者身不壞故。などは略す。

涅槃經講義に云はく、小乘にては無常の色受想行識を擲ち去り

て、別に常住の色受想行識を得よ。無常の色と常住の色とは、別物なりと見れども、大乘にては、之を一體と觀る。夫、醉生夢死し情慾のまゝ動きたる人間は、無常の色受想行識を所有すれども、一旦覺醒して修道の歩みを運ぶときは、無常から解脱して遂には常住の德を具へ、此身そのまゝ涅槃の身心を得るものとす。要するに有に即して空を見、無我に即して我を見るこそ、始めて中道の理に達したれと謂ひ得べし。是の中道を佛性と名づく。外道は迷中に苦み、涅槃は眞樂の境地、有爲法の生滅遷流を免る。涅槃の實德は世の泡沫に似たる常樂我淨に非ずと知るべし。

(十四) 予嘗て師範學校長の命に因り心理學を生徒に教授せし事七年。その內明治十六年一月より十九年十二月まで四年間は、井上哲次郎師が英國人ベイン氏の心理學を抄譯せる心理新說四册を

教授せり。書中不明なる所は、英文の原書を調ぶるに於て清水誠吾師を度々煩はせり。又或る短期講習生の爲めに、四册中の要領を抄して心理鉤要一册を編み、英國人ヘブン氏の心理學書を譯せられし西周先生に題辭を賴み、心理者註我也の句を乞ひたり。今に至り釋迦如來の涅槃經を讀み、離五陰外更无別我の句を見て轉た感歎に堪へず。(五蘊は新譯、五陰は舊譯なり) それ釋尊は昭和十年より二千四百十八年以前に於て、既に五蘊の外に別の我無しと曰へり。予が心理は我を註すと謂ひしは、今より五十年前なり。彼此相比べ視て感慨無量なり。抑身體の色と心識の識と行爲の行との三は、我に就きて最も重なる者なり。然れば方今心理を說くに、先づ是の三を五蘊の中より擇び拔きて之を示し、生徒の了解し納得したる上にて、受、想を說きた

し。しかしその節には、受想の代りに知情意の區別に順ひて說く方が便利なるかと考ふ。之を概想するに五蘊說に便利なる点もあり、亦知情意說に便利なる所もあり。兩說參考の後にて教授すべき方が、尤も便利なるかと愚考せり。

(十五)法華經方便品に云はく、是故說一乘、是法住法位世間相常住と。說一乘とは、聲聞緣覺に擇けて佛乘をば一乘といふ。是法とは、一乘實相の法なり。大藏法數に云はく、如來以一乘實相之法運諸衆生同到涅槃彼岸と。織田師の佛教大辭典に云はく、法位とは眞如の異名也。眞如は諸法の安住する位なる故にと。世間相は、諸法といふに同じ。常住とは實相の異名也と。宗鏡錄七に言法位者即眞如正位故。智論云法性、法界、法住、法位、皆眞如異名也と。

書中自序より卷末參考に至るまで、彼此聯想してその要領を認め給へ

(一)不生不滅の古道歌　序文中にあり　(二)長壽法の五箇條　序文中にあり　(三)實相無相也。以無相故不生不滅也。不生不滅即是涅槃也。悟道歌の五十頁。及卷末參考の終。(四)黑住師曰はく、何程無理非道の事たりとも、腹を立てずば乃、極樂世界なり。岸澤師曰はく、大般若經に衆生の薄福なる、淨を以つて穢となすと。人の心持一つで極樂とも成り地獄とも成ると。米田師曰はく、心に煩惱あるを穢といひ、煩惱なきを淨といふ。別に淨土穢土の境域あるに非ず。唯、人の心に由るのみ。法華論に曰はく、煩惱なき衆生の住處を淨土と名づくと。悟道歌五十二頁　(五)照見五蘊皆空、度

一切苦厄。　悟道歌五十四頁及卷末參考六十八頁を見よ。　(六)孟子曰、天將降大任於是人也、必先苦其心志、勞其筋骨、餓其體膚、空乏其身行、拂亂其所爲云々　又曰人之有德慧術智者恒存乎疢疾也。　卷末參考の六十二頁、六十三頁に出づ。　是は悟道歌の艱難憂戚成汝于玉の金言に符合せり。　(七)孟子曰入則無法家拂士、出則無敵國外患者、國恒亡。是は憂國志士の爲に引く。　(八)易繫辭傳曰、幾者動之微、吉凶之先見者也。　是は悟道歌十八頁の爲に引く。(以下は皆卷末參考の中に在れば一々之を辨明せず。　讀者の御記憶を希ふ)　(九)中庸曰、君子無入而不自得焉。　歌は十七頁に在り　(十)論語顏淵篇、子曰、君子不憂不懼。　歌は五十三頁に在り　(十一)法を聞き現世にて往生すると後世にて往生するとは、機根に因りて相違ありとの說。　(十二)生死の無常無樂無我無淨に對して、常樂我淨と執ずるを凡夫の

四顚倒とする說。　涅槃の常樂我淨に對して無常無樂無我無淨と執ずるを二乘の四顚倒とする說。　(十三)神秀上座の偈。　身是菩提樹、心如明鏡臺、時々勤拂拭、勿使惹塵埃。　六祖惠能の偈。　菩提本無樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵埃の註　(十四)涅槃經、高貴德王菩薩品の一章を引く。

跋

阿保先生は予の舊師なり。回顧すれば五十有餘年の昔、予が十七歳にして三重縣師範學校に入るや、先生より國語、作文、心理學の教授を受くること二年、後ち東京高等師範學校に遊び、歸來先生と共に母校職員の末に列りしが、再び家を擧げて上京し、身を以て實業界に投じたり。先生も亦東京高等師範學校に赴任して上京せられしが、數年の後辭任して鄉國に歸臥し、悠々自適、閑日月を樂しみて今日に至らる。

予や今は古稀の齡を超えたれば、舊師の存するもの幾んど希なり。獨り先生矍鑠として壽康、赭顏睟目、舊態を變ぜず。資性恬淡素朴、人に接する深切にして城府を設けず。言は天眞より出で、貌は仙骨を帶び、一たび先生に對すれば、春風自ら坐間に生じて、人をして陶然其の德に融和せらる。

予が實業界に投ずる爲に上京せしより、既に四十餘年。其の間每年一兩回歸國するを常とし、歸國すれば必ず先生を津の閑居に訪ふを常とす。是れ先生の予を招くにあらず。予の先生に求むるあるにあらず。常に先生の高風を敬慕し、少閑あれば歸國して、我が足は先づ先生の門に向ふなり。門に入れば先生夫妻欣然として我を迎へられ、其の昔ながらの風丰を拜する

時は、この七十餘歳の老軀は、忽ち十七八歳の昔に若返りたる心地して、清談款語、時の移るを覺へず。師弟の情、眞に靄然として掬すべし。

昨夏歸國して先生を訪へる際、偶〻悟道歌編著の事あるを聞き、予は歡んで之が出版を約諾したり。但先生より其の稿を送られし後、塵事倥偬、荏苒數月を經たり。今茲先生が米壽を迎へられたるを機とし、故舊門人相謀りて一大祝宴を開き、此の書を記念として出版せんと申送りしに、先生は卽時に書を寄せて、祝宴の事を謝絕せられたり。曰はく、（一）遠方より都合して御出下さるる事は御氣の毒也（二）私は歳老い酒飲まず。酒宴に招かるる事は、食養生に害あり。壯年の時とは違ひ無理が利かず、內心は有難迷惑也。（三）饗應する方は、時を費し、費用を要し、人間生死の一大事に非る事に御盡し下さるは、御自分に害ありて、他人に左ほど益なし。（四）宋の戴復古が七夕の詩に、從來世事皆兒戲。不獨人間乞巧樓、と詠ぜしは高見なり。米壽なども世俗のならはしにて悟道者の取らざる所なり。されば賀の催しは、切に御斷り仕る。只偏に難有感佩するは「悟道歌」を印刷給はる事也。と、言々至誠より出で、句々眞情を露はし、脫俗非凡、悟道に徹底せるを見る。乃ち此事を卷末に併せ錄して、以て同門同學の士と共に、永く先生の心像を偲び、景仰の意を表せんとすと云爾。

昭和十年仲夏

門人　石川正作

昭和十年八月十六日印刷
昭和十年八月二十日發行

悟道歌（安心長壽の道）　非賣品

著作者　阿保友一郎

發行者　東京市小石川區林町十八番地　東洋社　石川正作

印刷者　東京市下谷區二長町一番地　凸版印刷株式會社　井上源之丞

終